

【巻頭言】

「唯一無二のセラピスト」

東北文化学園大学 医療福祉学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻  
香山 明美

もう20年ほど前のことである。精神科病院の作業療法士として勤務する筆者は、ある日20才代の統合失調症の男性を担当した。薬物療法では、一定の効果しか得られないという主治医の判断で外来作業療法が開始された。帰国子女であった彼は、高校時代に帰国し日本での生活を始めて以来友人はなく、海外生活にまつわる強い妄想があった。彼が持参するクラシック音楽を聞きながら、海外生活と帰国してから受けた（自分が受けたと感じている）他者からの妬みや嫉みに関する辛い体験を傾聴する作業療法を継続していた。海外での生活体験は本人にとって楽しい体験ばかりではなかったのに、海外生活をしてきたということが唯一の彼の支え（プライド）でもあった。彼の日常生活は、周囲の人（家族以外）が自分の海外生活経験を妬み、自分を攻撃してくるというストーリーで形作られて、隣家の物音や自宅前を往来する車の音にも耐えられない状況が続いていた。このことから、両親は田舎の一軒家に住まいを見つけ引っ越すという対応をした。自宅での生活は、田舎に引っ越してから散歩ができるようになったが、ほぼ自室で引きこもった生活が続いた。誰かが触ったものには触られない不潔恐怖が被害妄想を更に強化した。

外来作業療法に来ることが唯一の外出であり、家族、主治医以外の人と交流する機会であった。彼は年配の女性セラピストには安心できたようで、可能な限り来院され自分の妄想の世界を披露してくれた。彼には、病識がある程度あった。自分は統合失調症であり、狙われている感覚は妄想であり、自分を悩ませる声は幻聴であること等は、知識として理解できるようになった。その状況とどのように付き合ったら良いかという話題もできるようになっていった。しかし、少しでも統合失調症としての一般的な対応法などを話題にすると、彼が主張し続けたことは、「自分はみんなとは違うんです。自分は統合失調症だけれど、他の人とは違う特別な統合失調症なんです。」ということだった。だから、『みんなと同じ対応をしないほしい、自分には自分にしかわからない・・・だって香山さんは幼いころから外国で転々とした生活を高校時代までしたことないでしょう、こんな人は他にはいないでしょう。』その彼の心の声を聴き続けることしかセラピストとしての私にはできなかった。しかし、世界で一人しかいない唯一無二の統合失調である彼の想いを聴き続ける唯一無二の存在であることも確かだった。

統合失調症、うつ病、脳卒中、パーキンソン病、骨折・・・セラピスト養成は多くの疾患教育とその疾患に基づく治療学を教授している。基礎的な学びを提供することが使命である養成教育には必須のことであるが、それと同等に対象者自身の人生に寄り添える理念と技術教育が必要だと感じる。対象者の心の声を聴き続けることができるセラピスト、それこ

それが本物の治療者であり対象者一人ひとりにとっての唯一無二のセラピストだと思う。このようなセラピストになれるような養成教育ができれば、と切に願う。そして、毎年発刊されるこの紀要が、唯一無二の教員になるための切磋琢磨の足跡になることを目指したい。